



羅針盤



室田 浩之
Murota Hiroyuki

大阪大学大学院医学系研究科情報統合医学講座皮膚科学 准教授

痒み、十人十色。

「感覚」はどのように生まれるのでしょうか。表皮と皮膚を支配する神経は外界からの刺激を感受します。皮膚の自由神経終末、メルケル細胞、マイスネル小体、パチニ小体がそれぞれ疼痛・温度、触覚、圧力、振動を感知し、中枢神経にその情報を伝えます。しかし感覚は皮膚でのみ作られるものでもないようです。ヒトは痛みや痒みをイメージするような映像を見たとき、イメージに一致する感覚を得ることがあります。このような感覚の伝染現象は高等動物の脳に備わったミラーニューロンの活動によると説明されています。痒みの伝染は視覚的情報のみならず、皮膚をボリボリと搔く音による聴覚的情報によっても生じることが知られています。つまり、ヒトは感覚を受動的に感じることも、能動的に作り上げることもできるのです。

痒みは1660年に神経生理学者のHafenreffer博士によって、「搔きたい衝動を引き起こす不快な皮膚の感覚」と定義されました。痒みという不快な感覚は、生体が外界からの危険を察知する信号として役立ちます。例えば皮膚に害を及ぼす物質が付着すると、そこに搔きたいという情動(=痒み)が生じ、搔破によって皮膚から危険物を引き剥がすことができるのです。

19世紀後半から20世紀にかけて、痒みは「弱い痛み」であるとも考えられていました。しかし、強い痒みは痛みにならないこと、モルヒネは疼痛を抑えるが痒みを生じるなどの知見から、近年では痛みと痒みは本質的に異なる感覚と解釈されています。何よりも、各々の感覚で生じる反射行動が決定的に異なり、痛みは回避行動、痒みは搔破行動を呈します。さらに痒いところを搔くとな

んとも気持ちが良いですが、痛みから回避しても快感は得られません。すなわち「搔く」ことは私たちにとって特別な行動といえます。

この搔破行動は、互いに性質の異なるさまざまな感覚で誘発することができます。たとえば、歯磨きをしているときの「むずむず」とした鼻の痒さ、蚊に刺されたときの「ピリピリ／チクチク」とした痒み、イオントフォレーシスなどを通電したときの「ジリジリ」とした痒み、産毛に微細な振動が加わったときの「くすぐったいような」痒みなど、どれも質の異なる感覚です。このことは痒み感覚が画一的なものではないことを表しています。臨床現場で訴えを伺うことの多い痒みですが、その感覚の性質は患者ごとに異なると考えられます。「この患者さんの痒みはどんな痒みなのだろう」と一歩踏み込んだ^{みかた}診方をする^{みかた}ことで、思いがけない病態や治療に気づくこともあります。

さて、本誌の痒み特集号としては、過去に塩原哲夫先生の「痒みシュラン 痒い皮膚病・決定版(2003年9月号)」、宮地良樹先生の「かゆみに迫る(2007年7月号)」の2つがあります。どちらも何度読んでも新鮮な知識の得られる名書ですが、これらの痒み特集号から10年が経過し、本号で新たに痒み特集号を担当させていただくことになりました。特集タイトルは、痒みの多彩さを意識して“十人十色”としています。痒みの臨床・メカニズム・評価方法に関する最近の話題、痒みの増強に関わる身近な要因と生活指導に役立つ情報を取り上げております。これらの情報が、痒みの診療および研究の一助となれば幸いです。